

水稲育苗管理のポイント

令和2年4月
後志農業改良普及センター

1. 出芽揃い～移植前までの管理方法

項目		出芽揃い～本葉1.5葉期	1.5～3.0葉期	3.0葉期～移植前	
目標		根の発育促進	苗の徒長防止	外気温に慣らす	
管理のポイント		極力かん水を控え、過湿を避ける	高・低温、過湿・過乾を避け、十分な換気で徒長を防ぐ	かん水して土壌養分の吸収を促進し、外気温に慣らす	
管理内容	温度	基準	20～25℃	18～20℃	18℃～外気温
		計測目安	葉先の位置		
	方法	2重トンネルは夜間のみとし、日中は25℃を超える場合は換気を行う	晴天日は早朝からビニールを開放する	ビニールは昼夜とも開放（晩霜には十分に注意）	
	かん水	目安	早朝、葉先に水滴の付着が少なくなったとき		
方法		<ul style="list-style-type: none"> ● かん水が必要になったら、一度に十分に行い、床土全体に水が浸透したことを確認する ● かん水は早朝に行い、気温が下がるときは避ける 		水分不足は養分の吸収を妨げ、苗の老化を助長するため、十分にかん水する	

※夜間は10℃以上を保ちましょう

2. 早期異常出穂を防ぐために

～2.5葉期以降はハウス内温度を25℃以下に～

2.5葉期以降の高温で早期異常出穂が発生しやすくなります。

特に「ゆめぴりか」や「ななつぼし」は早期異常出穂しやすいため注意が必要です。また、成苗ポットは育苗箱の温度が上がりやすいので注意して下さい。

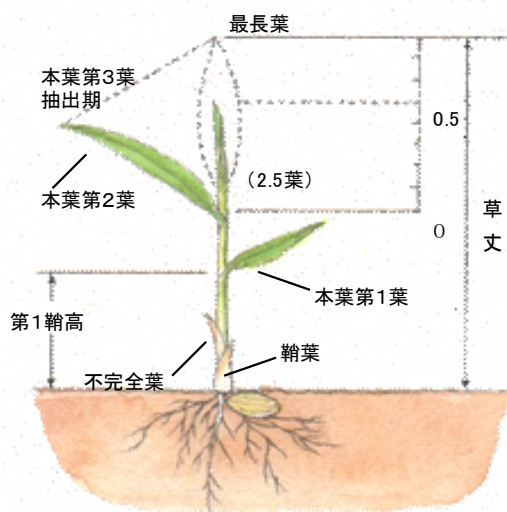


表1 移植時苗形質

	中苗マット苗	成苗ポット苗
育苗日数	30～35日程度	30～35日
草丈	10～12cm	10～13cm
葉数	3.1葉以上	ななつぼし：3.6～4.0葉以内 ゆめぴりか：3.6～4.3葉以内

図1 苗の各部位の名称と葉齢の数え方

3. 育苗期間の病害について

(1) 苗立枯病

一般的に育苗期間中の低温、日照不足で苗の生育が不順な時に発生しやすいですが、適切な管理を行えば発生を防ぐことができます。

耕種的防除を第一として健苗育成に努め、薬剤防除は補助的な手段としましょう。

○耕種的防除のポイント

- ・育苗ハウスの温度管理に十分注意し、極端な低温や高温は避けましょう。
- ・極端な多肥や少肥は控えましょう。
- ・緑化中の異常低温にも注意しましょう。

表2 苗立枯病の特徴

苗立枯病菌名	病徴	伝染経路・発生環境
リゾープス菌	育苗箱の一部又は全体が白いかびで覆われ、やがて灰白色になる。	胞子飛散で空気伝染する。 床土の高pH(pH5.5以上)や出芽時32℃以上の高温多湿で発生しやすい。
フザリウム菌	根が褐変し、地上部は萎ちようし、黄化、枯死する。地際部は靱に白色～紅淡色のかびが見られる。	床土の高pH(pH5.5以上)や過湿、緑化期の10℃以下の低温で発生しやすい。
ピシウム菌	症状はフザリウム菌に類似するが、地際部にかびは見られない。 俗に「ムレ苗」と呼ばれ、苗が弱った状態で急に温度が上がると発生しやすく、育苗後半に坪状に赤茶けて萎れる。	床土の高pH(pH5.5以上)や過湿、緑化期の10℃以下の低温で発生しやすい。
トリコデルマ菌	床土の表面や種籾の周囲に白いかびが見られ、やがて青緑色の胞子塊を生じる。	胞子飛散で空気伝染する。 床土の低pH(pH4.0以下)で発生しやすい。

○薬剤防除

表3 苗立枯病の防除薬剤（フザリウム菌、ピシウム菌による苗立枯病の場合）

商品名	希釈倍数	1箱当たり 使用液量	使用方法	使用時期	回数
ヒドロキシソキサゾール・メタラキシルM液剤	500～1000倍	500ml	土壌かん注	は種時または発芽後	1

※まん延防止のためには出芽後に実施

(2) イネばか苗病

種子伝染性の病害です。育苗箱中で発生した場合は、育苗箱中で感染が拡大するため、抜き取り・廃棄処分を行って下さい。



写真1 イネばか苗病によって徒長した苗